

第14回

「子供の頃からアイディアマン」

最近の若い連中にはハングリー精神が足りない。中には骨のあるヤツもいるが、大半はソフトで女性っぽい感じだ。何ひとつ不自由しない世の中だから、そうやってきたのかな。仕事に対してハングリーになれない社員が増えているんじゃないかって心配になる。昔はオレも含めてギラギラしているヤツが多かったが……。

畑には「馳走がいっぱい

」
「どうして大須賀さんは仕事に対してそんなに一生懸命になれるの？」

そう聞かれることがある。なんでだろう？
正直わかんない。意識しているわけじゃなくて、自然と体が動いてしまう感じ。小さい頃は食べることに必死だった。その時の経験があるから、いま何事に対しても一生懸命になれるのかもしれないな。

オレが中学を卒業したのは昭和三〇年。戦争が終わったのが昭和二〇年だから、ちょうど戦後で日本が一番苦しかった時期を小中学生として過ごしたことになる。当時はとにかくモノがなかった。食べることもままならない。食欲旺盛な年頃なのにいつも腹を空かしていたという記憶がある。

前にも説明したけど、オレは十一人きょうだいの一〇番目。実家はうどん屋だった。うどんがあるから食事には困らないというイメージがあるかもしれないけど、たくさん子供を抱えているもんだから、学費が払えないこともあるくらい生活は貧しかった。

腹いっぱい食べたい。でも家で出される食事には限りがある。ほかのきょうだいたちの分まで食べてしまつわけにはいかない。お金なんて持っていないから、外で何かを買って食べることもできない。それでも何とかして空腹を満たしたかった。どうすれば腹いっぱいになれるのかをいつも考えていた。

モノがない時代でも畑にはいつも野菜や果物といった馳走があった。当時はこれを拝借することが空腹を満たすのには一番手っ取り早かった。拝借という言葉は響きがよすぎ

「前回までのあらすじ」
オレの話聞いてみたい。社員にも聞かせたいという依頼が多い。最近は一〜二回のペースで講演している。昨年末は日本通運でも講演する機会があった。講演では台本なんて用意せず、毎回思いっくままに話している。

るな。よつするに畑泥棒つてやつさ。どうすれば畑の番人に捕まることなく、お目当てのモノを手に入れることができるか。それこそ「必死」になって、知恵を絞つたものだった。

夏のおやつは西瓜にかぎる。なんてつたつて甘くておいしいからな。八百屋で買つ？ まさか。高くて無理。西瓜こそ畑から拝借するのさ。どうやって西瓜を手に入れたのか。これから説明するけど、あくまでも昔の話だからね。くれぐれも今年の夏に真似しないように。

西瓜というのは大きくて重い。これを畑から持ち出すのは至難の業だ。小学生の頃はまだ体も小さいから、一玉を持ち上げるのも一苦労だった。運び出す途中で落としたら割れてしまつ。モタモタしていたら、畑の番人に見つかつて叱られる。最初はなかなかうまくいかなかった。

その場で食べて証拠隠滅

それでもどうしても西瓜が食べたい。何かいいアイデアはないだろうか。そこでオレはこう考えたんだ。持ち出すのが難しいのであれば、畑の中で食べてしまおう、と。持ち出そうがその場だろうが、西瓜を食べるといっ行為に変わりはない。わざわざ重い思いをしたり、番人に見つかりやすいというリスクを負う必要はない。そつやつて発想を転換したら、西瓜なんて簡単に手に入れることができた。

まずストローを用意してポケットの中に入れておく。そして読書に耽っている麦わら帽子姿の番人の目を盗み、匍匐(ほふく)前進のスタイルで葉の陰に隠れながら畑の中に入っていく。お目当ての西瓜の横に辿り着いたら、西瓜に穴を空けてストローを差し込む。それで準備は完了だ。あとは中身をチューチューと吸っていくだけ。

普通、西瓜は割って食べる。しかしオレはなるべく割らないようにした。番人に見つかったときのためだ。中身だけをストローで抜き取ってれば、西瓜の外形は変わらない。だから見つかったも番人に怒られない。「食べていない、証拠がないじゃないか」といつて逃げ切ることができるわけだ。

ただし、ストローで吸うと食べ終わるまでに時間が掛かる。面倒臭くなって割って食べたこともあった。しかし、それができるのは番人がいなかったり、監視の目が厳しくない時だけ。

基本的にはチューチュー吸って食べてしまうことにした。割って食べた時は後に葉っぱで残骸を隠してから帰ってきた。

当然、西瓜には当たり外れがある。甘い西瓜もあれば、渋い西瓜もある。ストローを差し込んで吸ってみるまで、どちらを引いたのかわからなかった。しかし途中から大きい西瓜はそんなに美味しくないことがわかった。それからなるべく小さい西瓜を狙ってチューチューやることにした。

それでも外れを引くことがあった。ところが、しばらくすると今度は一〇〇%当たりを引けるようになった。農家の人たちの動きをじっくりと観察していたら、ある日、実がなつてから収穫するまでに法則みたいなものがあることに気づいた。それ以来、渋い西瓜を掴まされることがほとんどなくなり、甘いものだけをおいしくいただけるようになったんだ。

西瓜というのは間引きしながら育てていく。最初の実がかたが歪(いびつ)で味もよくないから捨ててしまふ。残すのは二つ目の実から。そして一株につき十字型に四つの実がなるように栽培していき、熟れ具合を見ながら収穫する。

西瓜畑に出入りするようになって間もない頃、オレはある程度の大きさになった西瓜を適当に拝借していた。しかしこれではダメなんだ。本当は農家の人たちが収穫しようとしている西瓜を、収穫の前日あたり頂戴するのがベスト。出荷直前の西瓜は熟れていて一番

おいしいからな。

農家の人たちはちょうどいい収穫のタイミングをどうやって把握しているのか。その答えは意外と簡単だった。実は農家の人たちは西瓜の実の横に棒を立てた日から三五日経ったら収穫していた。ということはそれよりも前は棒がささったのを確認して三〇〜三五日までの間に西瓜を食べてしまえばいいわけだ。例えば、赤色の棒がささったのが六月一日だったら食べ頃は七月五日前後。黄色い棒がささったのが六月一日だったら七月二〇日くらい。そんな具合に西瓜を拝借すべき日が計算できるようになった。



小学6年生の頃のクラス集合写真。
前から3列目、右から3番目がオレ。

女子生徒の弁当を狙う

西瓜の時期が終わると次は梨だった。梨泥棒は西瓜よりもちょっとテクニクが必要だ。梨の実には木になる。西瓜の時のように葉っぱの陰に隠れることができない。木の陰に隠れたいところだが、梨の木は幹が細いから体がちやんと隠れない。畑に入って実をもぎ取ろうとすれば、必ず番人に見つかってしまう。

それでも番人にも死角があった。木の上だ。番人は梨畑に入ってくる泥棒がいまいかどうか地面のあたりを中心にチェックしている。木の上には目を配らない。だからオレは木の上から梨の実を頂戴することにした。木の上から手を伸ばして梨の実をもぎ取る。番人は離れたところにいるため、さすがに木の上の手の動きを見つけないのは難しいだろうと考えたわけだ。

梨畑でも番人はいつも本を読んでた。畑のほうに目をやるタイミングはいつも決まっている。オレは番人の目が畑から本に移った瞬間、畑に入り猿のようにササッと木の上に登る。そうすれば番人はオレに気がつかない。

木登りに成功したら、あとはやりたい放題だった。無制限の梨狩りが続く。梨畑の近くに小さな川が流れていたんだけど、そこにもぎ取った梨をどんどん投げ入れていく。すると、下流のほうに友達が待っていて、投げ込まれた梨を拾ってくれる。分業体制ってやつだな。

そうやって手に入れた梨の味は最高だった。川に投げ込んだ梨はちょうどいい具合に冷え

ている。なんともいえないおいしさ。昔は甘いジューズが飲める機会なんてほとんどない。梨はオレたちにとってジューズ代わりだった。

秋は梨のほかにはサツマイモなんかにも手を出した。これは知恵を絞るまでもなく、畑から抜いてくるだけ。それでも食べ方はちよつと工夫したよ。落ち葉を使って焼きイモにすると出来上がるまでに時間が掛かる。だから適当な大きさに切って鉄板の上で焼いて食べるようにしていた。

放課後のおやつには不自由しなかったけど、それだけでは全然足りなかった。問題は授業が始まる前。家できちんと朝ご飯を食べてきても、学校に行く途中で腹が減ってくる。特に中学生くらいになって体が大きくなってくると、一日三食では不十分。常にお腹が空いているような状態だった。

そこで思いついたのが弁当の盗み食いだ。盗み食いといっても先生の目を盗んで昼休みよりも前に弁当を食べる「早弁」のことではない。オレの場合、盗み食いと学校のみんが昼メシ用を持ってくる弁当を盗んで食べてしまうことを意味する。

昼メシには自分の家から持ってきた弁当を食べていた。盗んだ弁当はオレにとって二回目の朝食という扱いだ。いくら食べても物足りない。すぐに腹が減る。オレだけじゃない。当時、オレと同じくらいの年頃の男性はみんなそんな状態だったはずだ。

他人の弁当を盗むなんてひどい？ そりゃ

ひどいことだけど、ちゃんと盗まれる相手のことも考えていた。毎回同じ人の弁当を盗むようなことはしなかった。きちんと順番を決めて盗んでいたんだ。つまり誰か特定の生徒をイジメていたわけじゃない。

毎朝、中学校では朝礼が行われる。生徒たちは校庭に集まる。オレはその間に教室に忍び込み、その場で弁当を食べちゃう。そして朝礼が終わる直前にいったん学校の外に出る。しばらくしたら遅刻したふりをして、「おはようございまーす」と言いながら教室に入っていく。そんな手口だった。

いったん教室に入ってから鞆を机に置いてから朝礼をサボると、弁当泥棒の犯人がオレだということがバレてしまう。わざと遅刻するのはそれを避けるためだった。他人の弁当を盗み食いつけることが先生たちに知られたら大変だ。昔の先生は今の先生たちと違って迫力があつた。悪いことをした生徒を平手打ちすることなんて当たり前。サンダルや靴で叩かれることも少なくなかった。

盗んだのはほとんどが女の子の弁当だった。当時、男の子の弁当といえば、醤油をつけた海苔が敷き詰められている海苔弁当か、ご飯の真ん中に梅干しが一つだけのつかっている日の丸弁当。あまり美味しくなかった。これに対して、女の子の弁当には卵焼きが入っていたり、おかずがいっぱい。特にお金持ちの家のお嬢さんの弁当なんてとても豪華だった。

可哀想にオレに弁当を盗まれた女の子たち

はシクシクと泣いていたよ。恥ずかしくて弁当を盗まれたことを先生に言えない子もいた。女性には男性に比べて食が細いとはいえ、弁当がなければ、午後にお腹がグーグーと鳴り始めたに違いない。申し訳ないという気持ちがあつたわけじゃないけど、当時は他人のことよりもまずは自分自身のことと精一杯だった。せめてもの礼儀ということで、盗んだ弁当は残さずに全部食べるようにした。それで許してもらえ……。そんなわけじゃないよな。

弁当泥棒の代償

結局、弁当泥棒で捕まったことは一度もなかった。盗みに入るクラスや学年をかえるなど細心の注意を払っていたのがよかつたみたいだが当時通っていた地元・浜北町（現・浜北市）の北浜中学は一学年に四五〇人の生徒がいるマンモス校だった。そのため見つかりにくかつたのかもしれない。見事に時効が成立した。ところが、あれから五〇年が経って、オレが弁当泥棒だったことが同級生たちに知れ渡ってしまった。先日、オレの行きつけの料理屋で同窓会を開いたんだけど、その女将さんが弁当泥棒の話を出席した連中に全部しゃべっちゃったんだ。

そうしたら女の子たちが「(弁当を盗まれたのは)わたし、わたし」と言い出して大騒ぎになった。一人や二人ではない。女の子のほとんどが被害者だった。オレはひたすら謝るばかり。顔から火が吹き出しそうなくらい恥ずかっ

た。それでも女の子たちは昔の笑い話として水に流してくれた。本当に助かった。

恩返しというわけじゃないけど、被害に遭った女の子たちには今度、食事をご馳走することになっている。それで当時の悪事をすべて許してもらうつもりだ。弁当よりも高くついた？ いや、その逆。食事で満足してくれるなら安いもんだ。同級生たちにはほかに色々迷惑を掛けているからな。

こんな感じでオレは小さい頃、どうしようもない悪ガキだった。しかし、日本が豊かな国になった今、生徒たちには畑の作物や弁当を泥棒するという発想がないんだろうな。お腹が空いたらコンビニで何か買って食べればいい。好きな時に好きなモノを好きなだけ食べることができる。食べることに執着心なんてない。とてもいい時代だ。

しかし、いいことばかりじゃない。豊かになったことでハングリー精神を持ったヤツがすっかり減ってしまった。ポーっとしていても何ん自由なく食べていける。そんな恵まれた環境にあるのに、「もっとガツガツしろ」というのは無理な話なのかもしれない。

いまの若い連中は何かとして目的を達成しようと思いを絞ることを苦手としている。与えられたことはそつなくこなすが、応用が利かない。工夫して何かをやることができない。勉強は得意だから頭はいんだろっけ、どうも頭の回転は遅いよつな気がしてならない。

これに対して、オレは小さい頃から悪知恵

だけど、アイデアを出すことだけは天下一品だった。スイカや梨、そして弁当の泥棒もそうした能力がなければ成功しなかつた。どうやれば見つからずにお目当てのモノを手に入れることができるか。色々なことを試してみても、これっという方法に辿り着いた。

家の商売の手伝いからも知恵を絞ることを学んだ。小学校高学年くらいから始めた家の手伝いとは「うどん売り」のことだ。毎日、放課後に自転車で近所にうどんを売って歩いた。親から与えられた販売ノルマをいかに早く達成して、友達と遊ぶ時間を確保するか。そのために売り方に工夫を凝らした。物流通業の原点はこの「うどん売り」での経験にあると言ってもいい。詳しいことは来月号にまわそうお楽しみに。

(以下次号に続く)



おおすか・まさたか 一九四一年静岡県浜北市生まれ。五六年北浜中卒、ヤマハ発動機入社。青果仲介業などを経て、七一年に浜松協通送を設立。九二年に現社名の「ハマキョウレンクス」に商号変更した。二〇〇三年三月に東証一部上場。主要顧客はイトヨーカ堂、平和堂、ファミリーマートなど。流通の川下分野の物流に強い。大須賀氏は現在、静岡県トラック協会副会長、中堅トラック企業の全国ネットワーク組織である「JTP」ロジスティックスの社長も務めている。ちなみにタイトルの「やらまいか」とは遠州弁で「やつてやるついで」という意味。